

新寄稿：リーゼロート・ティーチェンの思い出 — アレクサンダー・ヴェルナーによる

目で買い物し、夢が壊れる

ハインツ・ティーチェンの未亡人リーゼロートが、夫について、さらにエーリヒ、ルース、カルロス・クライバーとの交友関係について語る。

リーゼロート・ティーチェンが、ベルリン国立歌劇場でソロダンサーとして雇われてから、数十年が経った。1920年代に彼女はそこで、後に夫となるハインツ・ティーチェンばかりでなく、ベルリン国立歌劇場の音楽総監督エーリヒ・クライバー、その妻ルースとも知り合った。驚くほど鮮明で生き生きとしているのが、この老婦人の思い出である。2009年8月、彼女は98歳の誕生日を祝った。エーリヒ・クライバーは彼女に個人的に会っていた。ベルリンでの仕事の時だけでなく、客演旅行の際にも会っていた。客演旅行の際は、彼女はハインツ・ティーチェンについて行った。ティーチェンは1926年から同国立歌劇場を指導し、1927年にプロイセンの全公立歌劇場の総監督となり、1931年にはバイロイト音楽祭の芸術面の長となった。まさにこうした旅行の際に、リーゼロート・ティーチェンと、後に世界的に称賛される指揮者カルロス・クライバーの母、ルース・クライバーとは親しくなったのである。二人は当時一緒にいることが多く、同じホテルで生活したり、町をぶらついたり、美術館を見物したり、二人の指揮者のリハーサルや上演によく一緒に見とれたりした。

楽譜台の花形たちのことは当時まったく話題にならなかった、とリーゼロート・ティーチェンは語る。クライバーにしても、ティーチェンにしても、レオ・ブレッヒにしても、全く素晴らしい指揮者であった、と。彼らにとっては、偉大なる夕べや成功だけでなく、オーケストラとの協力も問題だったのである。「彼らはオーケストラを自ら教育したので、オーケストラと一緒に多くのことを成し遂げました。それが偉大なオーケストラ、その音響、その演奏の秘密なのです。指揮者というのは、オーケストラが同意し、影響を与えてくれる時にのみ、自分が想像することを成し遂げるのです。それをこれら偉大な指揮者は理解しており、望んでいました。彼らは音楽家たちからも、そのようにすべてを引き出すことができ、音楽家たちを誇りに思っていました。それが今日、残念ながら大抵の場合、変わってしまっています。指揮者たちはどこかへ飛んで行き、リハーサルを2、3回行ってから始める。芸術を犠牲にして、です。」この二人の男はお互いに非常に尊敬し合っていたが、その良好な関係によって私的な接触が増した。ライバル意識とか、さらには妬みとかを、リーゼロート・ティーチェンはこの二人の間に認めなかった。リヒャルト・ワーグ

ナーとリヒャルト・シュトラウスに対する愛着も、クライバーとティーチェンとを結び付けた。リヒャルト・シュトラウスとは、二人とも近しく親交を結んでいたのである。「本質的にヴィルヘルム・フルトヴェングラーとは、彼らはまったく違っていました。ヴィルヘルム・フルトヴェングラーはいつも気難しい人で、自分のそばに誰にもいてほしくなかったのです。カラヤンスが楽譜台の新しい花形として現れたとき、そうした姿勢は彼にとって適切とは言えませんでした。他の指揮者たちがすでに年取ってきた時に、後進の面倒を見ていたわけですから。フルトヴェングラーはそうしなかったのです。」

クライバーとティーチェンはどちらかと言うと政治に無関心な男たちで、芸術のためにだけ生きたいと思っていた。しかし二人の人生を変え、二人の道を分けたのは政治であった。エーリヒ・クライバーが国家社会主義者たちの真意を見抜いて、妥協せず亡命していったのに対し、ティーチェンはベルリンに留まった。クライバーは有名なテアトロ・コロンド、すでに1926年から季節的な契約を結んでいたが、ティーチェンに今からでも、自分のあとについてアルゼンチンに来る気にさせようとしたが、無駄だった。「クライバーはブエノスアイレスから、この地でベルリン国立歌劇場のような歌劇場と一緒に築き上げようという申し出を持って来ました。」とリーゼロート・ティーチェンは回想する。「でも夫は、自分の楽団員やスタッフ全員を見捨てたくなかったのです。自分の歌劇場にあまりにも愛着していたのです。クライバーはがっかりして私たちを後にしました。」

ティーチェンはドイツ音楽史の一時代で最も重要な監督だが、戦後非ナチ化措置のなかで全く放免されたとはいえ、第三帝国における彼の役割については依然として異論があった。しかし、ティーチェンが確かにナチ党員の鎧を支える者だったとする評価は、もはや根拠がなくなっている。むしろ彼は、危険にも表裏ある言動を明らかに言い、多くの人々を助け、賢明に政治的に戦術を用い、巧みに困難を切り抜けたおかげで、命を救ったのである。彼は抵抗運動も支持したのである。リーゼロート・ティーチェンは、ナチ党員に抵抗しようという夫の決意にこそ、彼がベルリンに留まりたかった理由を見たのである。「当時どれほど多くの人々が秘かに戦っていたかは、後になって漸く知られるようになりました。私たちにとっては、物騒で恐ろしい時代でした。誰かが夫を連れて行こうとする場合に備えて、私たちの所には裏口がありました。」芸術家としてティーチェンは、ナチ時代にあって苦しんだ、と彼女は言う。「夫が最高潮にあり、目標を実現しており、そのうえパイロイトで楽譜台に立つという最大の夢が叶ったまさにその時に、あの時代が訪れたというのは悲劇でした。それは夫にとってつらいものでした。そのために死ぬほど悲しかったのです。」

それに対して 1890 年生まれのアーヒ・クライバーにとって、印象的な経歴ののち、安定しない放浪の年月が 1935 年に始まった。彼の悲劇は残っている。すなわち戦争、亡命、陰謀、復讐心のために、戦後のドイツおよびオーストリアにあって、さらに彼が 1956 年に早世したことで、彼は願いを実現することができず、真に相応しい死後の名声を得られなかったのである。クライバーとティーチェンは戦後再会した。リーゼロートとハインツ・ティーチェンは戦後まで結婚を延ばし、その後主たる住所をバーデン・バーデンに移していた。クライバーは一人で、あるいは妻ルースとともにシュヴァルツヴァルトで、近くの高級ホテル、ビューラーヘーエの客として保養するのが好きだった。ティーチェン夫妻がクライバー夫妻をホテルに訪ねたこともあり、クライバー夫妻がバーデン・バーデンに来たこともある。リーゼロート・ティーチェンが特に記憶に留めていたのは、一度クライバーの訪問を受けたとき彼が夫と、1955 年に予定されていたウィーン国立歌劇場の再開について話した時のことである。クライバーにとっては、ウィーン生まれでありながら愛するオーストリアで常に復讐心と戦わなければならない、ウィーンでは音楽で地歩を占めることが決してできなかったのも、非常に意気消沈する知らせであった。というのも、ウィーン国立歌劇場を引き継ぐという彼の希望は、ウィーンの陰謀の混乱の中で粉碎されたからである。

バーデン・バーデンでこの二人の男たちは、いつも芸術、音楽について語り、政治については一度も語らなかった。個人的なことについては話題にならなかったが、リーゼロート・ティーチェンはそれを不思議に思わなかった。クライバーはすでにそれ以前に私生活を覆い隠し、感情を隠していた。「バーデン・バーデンで私は、一度彼を駅まで送ろうとしました。彼はそれを喜んで受け入れてくれましたが、私が心から彼に別れを告げようとした時は、喜んで受け入れてくれませんでした。『いいえ、いいえ、いいえ。』と彼は合図して断りました。別れを彼は好みませんでした。私には彼が、身近にいる誰も自分に近づけたくないという感情に抵抗しているように思われました。」リーゼロート・ティーチェンの想像では、これはクライバーの両親が早くに亡くなった後、彼がつらい青年時代を送ったことと関係があった。「でもそのように控え目で、そう、時にはねつけるような印象を与えることがあっても、あのよういつもとても礼儀正しく、愛想がよく、非常に几帳面で、親切で、たぶん心も温かい男性であることは、まず確かです。私はまだ覚えているのですが、その後彼が戦後指揮していた東ベルリンで、クリスマス・イヴに硬貨のいっぱい入った鞆を持って街を歩きながら、貧しい人々にお金をプレゼントしたのです。」クライバーは無慈悲で命令的な男かも知れないという印象が、後に言い触らされることがあったが、いずれにせよ彼女の持った印象では、私的にも仕事においても、そういうことは決してなかった。「オーケストラに関しては、彼はとても厳しく、とても精力的で、多くを要求して、

何も漏らさなかったのは確かです。でも、そのようにしたのはやはり正しくて、音楽家たちはそれを喜んで受け入れたのです。彼ら音楽家たちはそれによって多くのことを学んで、彼をととても尊敬していました。」

エーリヒ・クライバーは、自らの夫婦関係の情緒的な深みについても、世間ばかりでなく、ティーチェン夫妻のような良き知人にも係わってほしいと思わなかった。それでもリーゼロート・ティーチェンは、家庭の幸福を疑わなかった。「それは私には、とても美しい夫婦関係のように思えました。ルースはあらゆる面で彼を愛し、献身的に彼に尽くし、彼のことを心配するあまり、彼にとって少し荷が重すぎたこともありました。彼の死は彼女を恐ろしく弱らせたに違いありません。当時彼女は、夫が死の床で両手を重ねている写真を同封して、手紙を私に送ってくれました。」

客演旅行のおかげで、リーゼロート・ティーチェンはルース・クライバーをよく知るようになっていた。「彼女は愛らしく、優雅に過ぎることは大切だと思わず、いつもとても上手に着こなしていました。彼女は全く自惚れておらず、とても好感が持て、ありのままに、性格が全体的に控え目な女性でした。私たちが旅行中に彼女は朝、よく私に電話をかけて、こう尋ねたのです。『目で買い物しませんか。』彼女は何も買わずにすべてをじっくり見るのが好きでした。」

ルース・クライバーはその頃、お金を旅行に投じる方が好きだった。ギュンター・ヘンレ公使が1926年にブエノスアイレスで、カリフォルニア出身のルースをクライバーに紹介していた。ルースは米国大使館員として、ブエノスアイレスで働いていたのである。間もなくベルリンで結婚した。ルースの家族は米国で暮らしており、彼女はできる限りいつも故郷へ旅立った。「奥様はいったいどこにいらっしゃるのですか。もう2日前からお目にかかっておりませんが。」リーゼロート・ティーチェンはある時、ミラノでクライバーにそう尋ねた。クライバーはこう答えた。「妻はニューヨークの歯医者の方へ、飛行機で急いで出かけました。」ルース・クライバーは飛行機を使うのが好きで、長時間かけて汽船の旅を我慢する方がましだと思っていた夫とは正反対だった。「新しいジェット機が出来たとき、彼女は是非ともさっそく試さずにはいられなかったのです。」とリーゼロート・ティーチェンは回想する。彼女は飛行機で行くのが非常に好きだった。夫と一緒に行くことは稀で、たいてい先に出かけた。そしてエーリヒ・クライバーには、もう一つ別の不安があったのである。「もし両親が飛行機で旅行中に墜落したら、誰が息子の面倒を見てくれるのか。」

ルースが米国の歯医者に行くことを事前に知らせず、後になってもそのことを話さなかったというのは、リーゼロート・ティーチェンには確かに不思議に思えたが、ルースは無口な時もあったのかもしれない。しかしリーゼロート・ティーチェンは、エーリヒやルース・クライバーが、息子のカルロスや、2歳上の娘ヴェロニカと一緒にいるところを見るのは稀であった。さらに不思議なのは、彼らに娘がいることを、リーゼロート・ティーチェンが今日まで何も知らなかったことである。「娘さんのことは一度も話題になりませんでした。お母様はいつも息子さんのことしかお話になりませんでした…。いつも、息子が、息子が、息子が、とばかりで…。」エーリヒ、ルースのクライバー夫妻が娘も心から愛していたことは、二人の手紙が証明している。だが息子の方が先だった。「カルロスは子どもの頃、たぶん乳母たちに面倒を見てもらっていた時分には、私に会ったことが一度もなく、後にご両親がバーデン・バーデンを訪れた際にもお会いしませんでした。」彼女がいつそう驚いたのは、60年代後半にカルロスから一通の手紙を受け取った時である。ハインツ・ティーチェンは1967年、バーデン・バーデンで86歳で亡くなり、カルロス・クライバーはシュトゥットガルト州立歌劇場で、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」の初演を準備していた。「カルロスは今シュトゥットガルトで契約を結んでいて、私にこう尋ねたのです。ハインツの持っていたワーグナーの楽譜かピアノ抜粋曲を、まだお持ちではないかと。しかし私はそれらをすでに芸術院に贈っていたのです。彼の父やティーチェンが止めたその段階を再び糸口としてそこから続けたい、と彼は書いてきたのです。それで私はとても驚いたのです。彼自身すでに有名な指揮者だったのですから。」

同時にリーゼロート・ティーチェンは、若きクライバーが夫を尊重してくれたことを喜んだ。再び彼女の心に浮かんだのは、ルース・クライバーが彼女に語ってくれた時の様子である。ルースの夫が初めは、カルロスが指揮者になりたいという希望に反対していたというのである。もし息子が、自分や他の偉大な仕事仲間ほど優れた指揮者にならなければ、全く意味がなかろう、と言ったのである。「でも彼女は、息子さんがそのように優れた指揮者になれるようにしたかったのです。」しかしカルロスがまだ非常に若かったとき、それは全く始まりに過ぎなかった、と。「お父様が彼を後になって支えてくださったことが、よくわかるのです。」

リーゼロート・ティーチェンについては、陰口、陰謀、噂は一度もなかった。カルロス・クライバーがあるいはエーリヒの息子ではなく、作曲家アルバン・ベルクの息子かもしれないとする根拠を、彼女は見出さない。ベルクとルース・クライバーのいわゆる情事から、カルロスがあるいは生まれることになったといういかがわしい話を聞くと、彼女は首を横に振る。「私にはそのようなことは想像できません。ルース・クライバーは夫を愛し、夫の

ためにのみ生きたのです。」

文： アレクサンダー・ヴェルナー

2009年夏、リーゼロート・ティーチェン女史との対談後に記す。